能恵姫物語（のえひめものがたり）

むかし、むかしのことである。天正二年（一五七四）というから、今から数えて、四〇〇年以上前のことである。

岩崎城主、藤原河内守道高に、美しいお姫様が生まれた。能恵姫と名付けられた。乳母はさわという人で、智学法印、栗田五郎の妻であった。



能恵姫龍神像
（龍泉寺所蔵）

生まれて一〇〇日あまりたったころから、姫は一日じゅう泣きつづけていて、どうしても泣き止まない。ある暑い夏の日のことであった。智学法印は、城中の白藤明神に泣き止めの祈願をしていた。乳母のさわは、泣き止まない姫を抱いて庭に下りた。大きな松の木の下に来ると、今まで泣いていた姫が、ピタリと泣き止んで、急にニコニコし出した。さわは、ふしぎに思って、ふと松の根もとを見ると、卵形のきれいな小石が落ちていた。手にとって見ると、まことに美しい光を放つ石であった。乳母はさっそく、城主道高公にさし上げると、公も大そう喜ばれ、姫の守り石とされた。

姫が三歳になったある日のこと、例のとおり、庭の松の根もとに、まっ白い小さな蛇が出て来て、じっと姫を見上げていた。乳母のさわは、はじめは余り気にも止めなかったが、姫が遊んでいると、必ず現れては、姫に見惚れているので、ふしぎに思うようになった。

そうしたある日のこと、乳母が姫の大便のおせわをしているところへ、その白い小蛇がまた現れた。乳母は、なにげなく、蛇に向かって「お前が、これの掃除をしてくれるなら、お姫様が大きくなった時、お前のおよめさんにしてやってもよいよ」と、じょうだんを言った。するとふしぎにも、蛇はたちまち、姫のだいべんを、きれいに食べてしまった。そんなことが時々あったが、乳母は余り気にも止めないでいた。

そのうちに、姫はだんだん美しく成長していった。

姫が一六歳になった年、増田城主、土肥次郎道近の媒妁で、川連城主の若殿、小野寺桂之助と結婚することになった。

そのお輿入れの日のことである。よく晴れた秋の日であった。昔は橋がなく、皆瀬川を渡るには、渡し舟を使った。姫を乗せた舟が皆瀬川の中ほどにさしかかると、今までからりと晴れていた空が、にわかにくもり、雷が鳴り、稲妻が光り、大暴風雨になってしまった。人々が、あれよあれよとあわてふためく中に、大きな竜巻が起きて、あっというまに、舟も、駕籠も見えなくなってしまった。

気がついた時には、姫の姿はどこにも見えず、空になったかごだけが近くの古内村に捨てられていた。

その年の冬であった。智学法印が、城中から「さがり淵」にのぞんだ庭で、雪に折られた桐の枝をしまつしていた。そのうちどうしたことか、あやまって、手に持っていた山刀を、淵に落としてしまった。それを拾おうとして下りて行くと、山刀は、法印を招くかのように水底に沈んで行く。そして、気がついた時には、水底の大きな岩穴の前に来ていた。

向うを見ると、そこに、能恵姫が立っているではないか。法印は夢かとばかり喜び、走りよって姫の手をとり「どうしてこんなところに居るのでございますか。お殿様はじめ、みんながお待ちでございます。さあ、急いで、お城に帰りましょう」と申し上げた。姫は静かに、頭を横にふり、岩穴の奥を指さす。見ると、そこには恐しい龍神のねている姿があった。「私は、ゆえあって、どうしてもお城へ帰ることができません。ながく、この淵にとどまって、人々の水難を救い、国土を守らなければならないのです。ついては、形見にどうぞこれを川連城の桂之助様にさし上げてください」と言って、頭にさしてあるくしと、こうがいをとって、法印に渡すと、さっと身をひるがえして奥にはいろうとした。法印はのがすまいと、姫の袖をおさえたが、姫の姿は奥に消え、片袖だけがちぎれて、法印の手に残っていた。

泣く泣く城中に帰った法印は、そのことを、詳しく殿に申し上げ形見の品々を川連城の桂之助の許にとどけた。

桂之助は、能恵姫の心をあわれに思い、その菩提を葬ろうために、川連根岸に寺を建て、その名も「龍泉寺」と名づけた。形見の品々は、その後ながく龍泉寺の宝物として、人々の涙をさそっていたが、そののち数度の火災にあって焼けてしまい、今は見ることができない。

龍泉寺は、それから明治二十二年（一八八九）に、今の野村に移ったが、もとの根岸の龍泉寺あとには、寺がはじめて建てられた時植えられたという大きな榧の木が、今もなお残っていて、人々にその昔をしのばせてくれる。

（『稲川町史』資料編「高橋利兵衛文書」龍泉寺縁起伝説などによる）